

麻六甲的肥前瓷器貿易

盧泰康

1. 前言

麻六甲，位於馬來半島西岸，是季風交會之地，連接東西海上航線的交通要衝。西元十六世紀初，葡萄牙人東來，並由印度洋進入東南亞水域，麻六甲港就成為葡萄牙壟斷東方貿易的首要目標。西元 1511，葡萄牙人佔領麻六甲。在葡萄牙帝國統治期間，麻六甲被視為印度領地 (Estado da India) 的第二大城，是貿易與宗教的中心，而東南亞的香料、印度 Gujerat 與 Coromandel 的布料皆以該城為主要集散地，日本與中國的物資，也要經過麻六甲轉運到西方 (Newitt 2005:165-167)。到了 1641 年，麻六甲城再度易手，歷經 5 個月的圍困，葡萄牙人最後開城投降，麻六甲成為荷蘭東印度公司 (VOC) 在亞洲的眾多據點之一。荷蘭人經營麻六甲期間 (1641-1824)，日本肥前瓷器亦為重要商品，有關當地所見肥前瓷器及其貿易狀況，歷來罕見報導，本報告主要目的，在於介紹馬來西亞所見之日本肥前瓷器，並配合文獻史料，試論 17 世紀後半至 18 世紀初日本肥前瓷器在麻六甲的貿易狀況。

2. 馬來西亞所見的肥前瓷器

馬來西亞所見的日本肥前瓷器大致可分為三類：

第一類為青花瓷，圖 1 錦地開光花鳥紋青花盤，現收藏於麻六甲 STADTHUYS 博物館。這類青花盤為模仿十七世紀中國外銷之克拉克瓷，但其紋飾佈局仍有自身特色，時代約為 1660-1680 年有田內山諸窯產品。類似東南亞地區出土品，見於印尼爪哇 Pasar Ikan 遺址 (佐賀縣九州陶瓷文化館 1990: 圖 151)。圖 2 為開光花鳥紋 VOC 字文青花大盤，現收藏於吉隆坡國立博物館。盤心 VOC 字樣，代表此類瓷盤明確為荷蘭東印度公司向日本訂燒瓷器，時代約為 1690-0 年有田諸窯產品。圖 3 為園景花盆紋青花大盤，現收藏於吉隆坡國立博物館。盤心勾繪折枝松樹花草盆景與欄杆，內壁與折沿部份為纏枝花草紋，時代約為 17 世紀末至 18 世紀初有田諸



圖 1: 錦地開光花鳥紋青花盤



圖 2: 開光花鳥紋 VOC 字文青花大盤



圖 3: 園景花盆紋青花大盤



圖 4: 錦地開光園景花盆紋加彩盤



圖 5: 刻花紋青瓷盤 (感謝陳達生先生提供標本)



圖 6: 印花紋青瓷盤 (感謝陳達生先生提供標本)

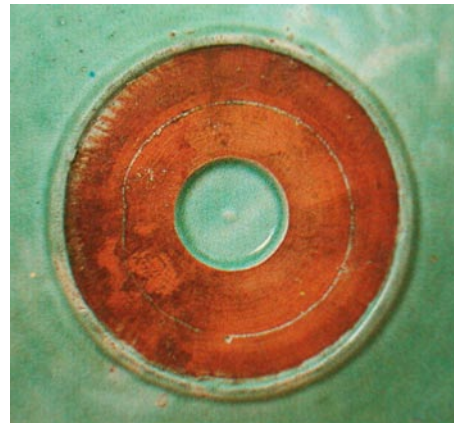


圖 7: 有田窯刻花青瓷盤 17 世紀後半 馬來西亞東部傳世收藏 (Harrison1995:pl.24)

窯產品。

第二類為加彩瓷，圖 4 錦地開光園景花盆紋加彩盤，現收藏於吉隆坡國立博物館。盤心勾繪折枝松樹花草盆景與欄杆，內壁與折沿部份為錦地開光紋，紋樣佈局同樣為模仿十七世紀中國克拉克瓷，時代約為 1680-1700 有田內山諸窯產品。

第三類為青瓷，圖 5 為刻花紋青瓷盤，出土於麻

六甲 Jonker 街。盤心有陰刻花草紋，器底足面粗寬無釉，時代約為 17 世紀後半，波佐見窯或有田窯產品。圖 6 為印花紋青瓷盤，亦出土於麻六甲 Jonker 街。盤心有模印花草紋，器底圈足窄細，施釉，底心有圈狀無釉帶，施以褐色鐵汁，時代約為 17 世紀後半，波佐見窯產品。上述同類青瓷盤，亦見於馬來西亞東部傳世收藏 (圖 7, 引自 Harrison1995:

pl.24), 以及印尼的 Banten lama 遺址 (大橋康二、坂井隆 1999: 圖版 7-9)、Pasar Ikan 遺址 (大橋康二 1990: 圖 187) 與 Tirtayasa 遺址 (坂井隆 2001:98)。早在 13-14 世紀, 中國南方所燒造的青瓷器, 已普遍在東南亞地區流行。而 17 世紀後半日本肥前生產的這類仿中國龍泉窯青瓷, 在東南亞地區廣為銷售, 正是延續此一區域性品味需求。

3.17 世紀後半麻六甲的肥前瓷器貿易

麻六甲曾經是東南亞經濟商業的中心, 但 1641 年以後, 荷蘭佔領下的麻六甲已經退居次要地位, 因為荷蘭東印度公司早已決定將印尼的巴達維亞發展成為亞洲貿易中樞。相較之下, 巴達維亞更靠近爪哇與東印尼的經濟富庶區, 且其西側的巽它海峽 (Sunda Strait) 也提供了安全與容易的歐洲航線 (Lee1998:47-48)。對荷蘭人而言, 攻佔麻六甲實出於戰略考量, 以防範其他歐洲勢力在麻六甲海峽建立據點, 同時以麻六甲做為海上航運的基地, 保護通過海峽的公司船隻。因此在整體貿易利益上, 荷蘭人必須確保麻六甲不會與巴達維亞競爭。在 VOC 的管理階層中, 麻六甲僅是其貿易網絡的殖民地之一, 駐留在麻六甲的 VOC 官員們, 需直接聽命於巴達維亞, 定期將他們的報告送至巴達維亞 (Tol 1998:10)。

17 世紀中期以後, 由於中國明末清初戰亂影響, 陶瓷輸出困難, 荷蘭轉而向日本採購肥前陶瓷, 以供應海外市場需求。從荷蘭文獻記錄看來, 儘管荷領時期的麻六甲, 重要性已大不如前, 但因其位處於通往印度、西亞航路的海峽要衝, 故在 17 世紀後半的亞洲陶瓷貿易上, 仍扮演了相當重要的角色。荷蘭東印度公司輸往孟買 (Bengal)、印度西岸科羅曼多 (Coromandel)、錫蘭 (Ceylon)、印度東岸蘇拉特 (Surat)、西亞波斯 (Persia) 以及麥加 (Mocha) 的日本瓷器, 頗多透過麻六甲轉運 (例見 Volker1959:17;1971:163-165、177、182、188-190、208)。再著, 基於採購上的便利, 部份瓷器訂單直接是由麻六甲接洽出島商館, 並由日本發船直航麻六甲。以 1659 年 5 月 27 日麻六甲致信出島商館 Wagenaer 內容為例 (Volker 1971:129-131):

閣下應在第一時間為麥加 (Mocha) 訂約, 依照

可敬的 Boucheljon 手頭上的樣品來製作, 所提到的瓷器如下 ...。」他們要求是否將有可能「在下個北面季風時, 經由台灣將它們運送至麻六甲, 並從那裡隨同其他產品送到麥加; 如果不行的話, 次年則無須經由巴達維亞, 因為來自麥加的船, 會於 11 月初再次由巴達維亞航往麻六甲。」

此外, 麻六甲亦為馬來半島本地陶瓷消費重要輸入港, 這些由 VOC 輸入的日本貿易瓷器, 有些是直接向日本訂購後, 裝船送抵麻六甲 (例見 Volker 1959:14、16、20;1971:155、156、158、162、177), 也有部份是由巴達維亞轉運而來 (Volker1959:14、15;1971:187、188)。

至於 17 世紀後半的亞洲華商貿易系統, 亦為麻六甲獲得日本瓷器的管道之一。以《華夷變態》所載史料為例, 即有王順官、黃賢因、徐佛官、吳天地等華籍船商, 曾經營過麻六甲 - 中國 - 日本航線之三邊轉口貿易 (榎一雄 1981:485-486、591-592、636-637、778-779、981-982、1013-1014、1367-1368、1682)。而荷蘭文獻中亦有類似記載, 例如麻六甲商館日記於 1685 年 2 月 15 日, 便明確提及華船載運日本瓷器進港 (Volker 1959:15):

巴達維亞的中國戎克船主 Ongoelja 從日本抵達該地, 航行 46 天, 載有船貨 100 捆瓷杯、50 捆碗、100 捆軍持 (gorgelet) 與 200 捆盤子。

4. 結語

經由以上討論可知, 雖然 1641 年以後, 麻六甲的經貿地位已不如以往, 但基於其位處海上航路的關鍵位置, 不少荷蘭東印度公司的貨物仍透過麻六甲進行轉運。以日本肥前貿易瓷為例, 麻六甲便負擔了對印度半島和西亞市場的轉口銷售。此外, 馬來半島本地陶瓷市場仍然活絡, 不少華商也曾藉由麻六甲進行肥前陶瓷貿易。

申謝

本文寫作期間, 感謝有田町歷史民俗資料館 野上建紀博士提供諸多寶貴意見。

參考書目

大橋康二

1990 《海を渡った肥前はやきもの展》，佐賀縣立九州陶磁文化館，佐賀縣。

大橋康二

2002 〈海を越えた肥前の陶磁〉，《国立歴史民俗博物館研究報告》，No. 94，頁 329-350。

大橋康二、坂井隆

1999 〈インドネシア・バンテン遺跡出土の陶磁器〉，《国立歴史民俗博物館研究報告》，No. 82，頁 54-79。

坂井隆

2001 〈十七・十八世紀のアジア陶磁貿易—バンテンでの貿易を中心に—〉，《東洋陶磁》，2000-2001，Vol. 30，頁 81-104。

榎一雄 編

1981 《華夷變態》，東方書店，東京。

Harrison, Barbara

1995 *Latr Ceramics in South-East Asia, Sixteenth to Twentieth Centuries*, Oxford University press, New York.

Lee, Kam Hing

1998 *Indonesian and Malaysian history from Dutch sources: Reconstructing the Straits of Malacca's past*, PENGAJIAN MELAYA BERSUMBERKAN BELANDA (Malay Studies from Dutch Sources), University Malaya and Perbadanan Museum Melaka, pp. 45-61.

Newitt, Malyn,

2005 *A History of Portuguese Overseas Expansion, 1400-1668*, Routledge, New York.

Tol, Roger

1998 *Hidden textual gems: An overview of sources in the Netherlands relevant for Malay Studies*, PENGAJIAN MELAYA BERSUMBERKAN BELANDA (Malay Studies from Dutch Sources), University Malaya and Perbadanan Museum Melaka, pp. 9-24.

Volker, T.

1959 *The Japanese Porcelain Trade of The Dutch East India Company after 1683*, E. J. Brill, Leiden, Holland.

1971 *Porcelain and The Dutch East India Company*, E. J. Brill, Leiden, Holland.

マラッカの肥前磁器貿易

盧泰康

(訳：野上 建紀)

1 前言

マラッカはマレー半島西岸に位置している。季節風が交接する地にあり、東西海上航路の交通の要衝地である。16世紀初、ポルトガル人は東進してインド洋を経て東南アジア海域へ入った。そして、マラッカ港はポルトガルが東方貿易を独占するための主要な目標となり、1511年にはポルトガル人はマラッカを占領する。ポルトガル王国の統治期間、マラッカはインド領(Estado da India)の第2の都市と見なされ、貿易と宗教の中心となった。東南アジアの香料、インドのグジャラートやコロマンデルの布生地は全てこの都市を主要な集散地としていた。日本や中国の物資はマラッカを中継して西方へ運ばれるようになった(Newitt2005:165-167)。1641年になるとマラッカは再びその主を替えることになる。5ヶ月間にわたって包囲された後、ポルトガル人はついに開城し、マラッカはアジアに数多く点在するオランダ東インド会社(VOC)の拠点の一つとなる。オランダ人がマラッカを経営した期間(1641～1824年)、日本の肥前磁器は重要な商品となった。しかし、これまでマラッカで確認された肥前磁器やその貿易状況について報告されたものはほとんどない。そこで本報告はマレーシアで見られる日本の肥前磁器を紹介し、文献史料と合わせて17世紀後半から18世紀初に至るまでの肥前磁器のマラッカにおける貿易状況を試論することを主要な目的とする。

2 マレーシアで見られる肥前磁器

マレーシアで見られる日本の肥前磁器は3種類に大別される。

第1類は染付磁器である。図1は現在、マラッカのSTADTHUYS博物館に収蔵されている染付花鳥文芙蓉手皿である。この類の染付皿は中国の海外輸出用の「カラック」磁器を模倣したものであるが、文様や装飾は肥前独自の特色を有している。1660～1680年代頃に有田の内山諸窯で生産されたものである。類似した東南アジア出土品は、インドネシアのパサール・

イカン(Pasar Ikan)遺跡出土品に見られる(佐賀県立九州陶磁文化館1990:図151)。図2は染付花鳥文VOC字入り芙蓉手大皿である。現在、クアラルンプール国立博物館に収蔵されている。内面中央にVOCの文字が入るもので、オランダ連合東インド会社が日本に注文して焼かせたことが明らかな代表的な種類のものである。1690～1700年代頃に有田諸窯で焼かれたものである。図3は染付花盆文大皿である。現在、クアラルンプール国立博物館に収蔵されている。内面中央部には折枝松樹花草盆と欄干が描かれ、内側面と折縁部には纏枝花草文が描かれている。17世紀末～18世紀初に有田諸窯で生産されたものである。

第2類は色絵磁器である。図4は色絵花盆文芙蓉手皿である。現在、クアラルンプール国立博物館に収蔵されている。内面中央部には折枝松樹花草盆と欄干が描かれ、内側面と折縁部は芙蓉手スタイルの文様が描かれている。文様や配置は17世紀の中国のカラック磁器を模倣したものと同様であり、1680～1700年代頃に有田内山諸窯で焼かれた製品である。

第3類は青磁である。図5は青磁刻花文皿である。出土地はマラッカのJonker街である。内面には陰刻による花草文が入り、底部の畳付き部分は幅が広く無釉である。17世紀後半の波佐見窯あるいは有田窯の製品である。図6は青磁印花文皿である。マラッカのJonker街で出土したものである。内面には印花花草文が入る。底部は蛇の目状に釉剥ぎされており、鉄錆が塗られている。高台は細く成形されており、施釉されている。17世紀後半に波佐見諸窯で焼かれたものである。類似した青磁皿は、マレーシア東部の伝世品(図7, Harrison1995:pl.24より引用)、インドネシアのバンテン・ラーマ遺跡(大橋康二1990:図187)やティルタヤサ遺跡(大橋康二・坂井隆1999:図版7-9)の出土品に見られる。すでに13-14世紀には中国南方で焼かれた青磁が東南アジアに広く流行している。そして、17世紀後半には中国龍泉窯青磁を模倣して日本の肥前で生産された青磁が東南アジアに広く輸出販売されている。この地域に続いてきた需要の性格を示している。

3 17世紀後半におけるマラッカの肥前磁器貿易

マラッカは東南アジア経済の商業的中心であったが、1641年以後のオランダによる占領下ではその地

位を後退させた。その理由は早くからオランダ東インド会社がインドネシアのバタビアをアジアにおける貿易の中心として発展させることを決定していたことによる。両者を比較すると、バタビアはジャワや東インドネシアの経済富裕地域や人口密集地に近く、しかも西側には安全で容易なヨーロッパ航路を提供してくれるスダ海峡があった。オランダ人にとってマラッカを攻撃占領することは、戦略面の理由から考えられたことであった。その他のヨーロッパ勢力を警戒するための拠点を築き、マラッカを海上航運の基地とすることで海峡を通過する自社の船を保護するようにした。全体の貿易の利益のためには、オランダ人はマラッカがバタビアの競争相手にならないような措置を講じなければならなかった。VOC の管理体制の中ではマラッカはその貿易ネットワークの一植民地にすぎず、マラッカに駐留する VOC の官吏達はバタビアの命令に直接従い、定期的にバタビアへ報告を送っていたのである (Tol1998:10)。

17 世紀中頃以降、中国の明末清初の戦乱の影響により陶磁器の輸出が困難になったことから、オランダは日本の肥前陶磁を購入することに転じ、海外市場の需要に応えることにした。オランダの文献記録をみると、オランダ領時代のマラッカは、その重要性が以前ほど大きなものではないにせよ、インドや西アジア航路へ通じる海峡の要衝に位置することから、17 世紀後半においても依然としてアジアの陶磁器貿易上で、重要な地位を占めていた。オランダ東インド会社はベンガル、インド西岸のコロマンデル、セイロン、インド西岸のスラット、ペルシアやモカに向けて日本の磁器を輸出したが、非常に多くのものがマラッカを中継して運ばれていた。さらに購入する際の便宜上、磁器の注文書が直接マラッカから出島商館へ出されることもあったし、日本を出帆した船が直接マラッカへ入校していた。1659 年 5 月 27 日にマラッカから出島のワーヘナールに宛てた書状の内容を例にあげる (Volker1971:129-131)。

「貴殿ははじめてモカへ送る契約をされるが、これに関してはブーシェリオン閣下の手頭（見本）に従い、以下のような磁器を製作されるように」そして、彼らは可能かどうかを求めている。「おそらく、次の北の季節風を利用し、台湾経由でマラッカに送り、そこから他の商品と一緒にモカに送る

ことが可能かどうか」「もし不可能ならば翌年はバタヴィア経由にしないこと、なぜならモカからの船が再び十一月の初めに再びバタビアからマラッカに向かうため。」

この他、マラッカはマレー半島自体の陶磁器消費のための重要な輸入港でもあった。これら VOC が輸入した日本の貿易磁器には、直接日本に向けて注文し、購入した後にマラッカに運ばれてくるもの (Volker1959:14,16,20; 1971:155,156,158,162,177) やバタビアを経由して運ばれてくるもの (Volker1959:14,15; 1971:187,188) があった。

17 世紀後半のアジアの中国商人の貿易システムにおいて、マラッカは日本磁器を得るための入手ルートの一つであった。『華夷変態』記載の史料を例にあげる。すなわち、王順官、黄賢因、徐佛官、吳天地等の中国籍海商がマラッカ―中国―日本の三角貿易を営んでいたとある。類似した内容の記載はオランダ側の文献にもあり、例えばマラッカ商館日記の 1685 年 2 月 15 日によれば明らかに中国の船が日本の磁器を積載して入港している (Volker1959:15)：

バタビアの中国のジャンク船主 Ongoejua は日本から 100 梱の磁器環、50 梱の碗、100 梱の軍持 (gorgelet)、そして 200 梱の皿を積載して、46 日航行して当地に到着した。

4 結語

以上の討論をとおして、1641 年以後にはマラッカの経済貿易の地位は以前ほどではないにしてもその海上航路上の重要な位置にあることから、依然として多くのオランダ東インド会社の貨物がマラッカを中継して運ばれたことを知る。日本の肥前磁器を例にすると、マラッカはインド半島や西アジア市場へ輸出する中継港としての役割を担っている。そして、マレー半島自体の陶磁器市場についてはまだ明らかではないが、多くの中国商人がマラッカを経由して肥前陶磁器貿易を行っていた。

(訳者注)

図版及び参考文献については、原文（中国語版）と共通である。